



昭和 47 年 (1972 年) 2 月号 (No. 320)

社団法人 日本山岳会 (J. A. C.)

目次

本文

モスクワの夜……………織内信彦… 1

46年度年次晩餐会所感…………… 2

望月君の勞を橋う会……………島田 巽… 2

明治の山旅を読んで……………神原忠夫… 3

深田久弥著作目録①…………… 4

UIAAについて……………吉沢一郎… 6

サラグラール及びランガールを
中心としたカムカルテ…………… 7

1971年のヒマラヤ

愛知教育大…………… 6

富士宮山岳会…………… 6

南部山岳会…………… 6

図書紹介

クマの本……………加納一郎… 8

図書室便り

新刊図書受入報告…………… 6

定期刊行物受入報告…………… 8

12月到着洋書…………… 9

地図受入報告…………… 9

図書委員会報告…………… 9

図書室利用について…………… 9

日本山岳会図書利用規定…………… 9

会務報告

ルーム日誌…………… 9

会員移動…………… 9

会員名簿訂正…………… 9

1 月理事評議員会…………… 10

復活新入会員…………… 11

住所表示変更…………… 11

モスクワの夜

織内信彦

——ソ連の岳人達と——

極東シベリヤ地域一週間ばかりの旅を了って露都モスクワの空港に着いたのは、国をあげての祭典である十一月七日革命記念日の前の日の払暁であった。モスクワでは十日ばかり過ごす予定だったので、日程のあいまいに赤露岳人と接触する機会がもてればと、同地駐在三年に及ぶ本会々員田村俊介君に予め連絡しておいた。ところが、全市の交通がストップしてしまふほどのソビエト最大の行事の前夜であったため、頼りの田村君との連絡がとれない。ようやくウクライナホテルに同君を探し当てて、ソ連アルビニズム連盟に対するアポイントをとったのが九日であった。

はじめ、私は突然の訪問であるし連盟のルームへ遊びに行き、セクレタリイにも会って話を聞いたり、写真でも見せてもらったりの気軽な考えでいた。ところが、田村君はソ連岳界に凄く顔がきいているとみえて、そういうことなら連盟のボロヴィコフ会長に

も時間の繰り合わせをさせよう、更に驚いたのは、ソ連岳界きつての長老であり英国山岳会の名譽会員でもあるアバラコフも引張りだそうというようになった。このようなお膳立てを整えたのは、書記長のアヌウフリコフである。約束の夕方に私と田村君は、スカチエルヌイ通りにある連盟の門を叩いた。正式の名称は、ソ連邦關係會議所 属スポーツ体育委員会全ソ・アルビニズム連盟である。従って、英国山岳会や日本山岳会のようなクラブ組織ではない。れっきとした國家機關である。室内へ入ると待ち受けていた長老のアバラコフがいきなり抱きついて握手をする。旧知のような扱ひである。この辺がロシア人の人なつこさ丸だしというところであろう。

ふと気がついてみると、アバラコフの左手の指が五本ともつけ根のところからない。握っている右手の指も先端を全部欠いている。華々しい彼の山歴を物語る傷あとを私は痛いほど強く握られた両の掌に感じしたのであった。それから二時間あまり、これと言った飾りつけも蔵書らしいものもおいてない殺風景な事務所で三対一の対談が行われた。田村君の大層流暢な通訳の

お蔭で、しばしば経験したことのある通訳のための時間の相互ロスが殆ど感じられなかったのは幸いであった。「ソ連岳界の今日の課題はなんですか、私としてはいいないソ連岳界であるから、ヒマラヤジャイアンツへの挑戦、もしくはエベレストについての抱負でも聞かれますか」と、ひそかにそんなことを期待しての質問であった。いくらか気をひく意味も手伝って日本はマナスル、エベレスト、マカルーの頂を踏む幸運に恵まれたが、と、しかし遠慮勝ちにはあるがつけ加えたのである。ところがどうだろう。アバラコフの口をきいて反射的にハネ返ってきた言葉は「ソ連アルビニズム連盟が目下真剣に取組んでいる問題は、いかにして山でアクシデントを起さないようにするか」、第二は、壁にかけてあったウシバの西壁の写真ととり外して、「このような垂直な壁で、不幸にしてアクシデントが起した場合どうやってこれを救援するかの技術対策の研究だ」ということであった。この地に足がついた地道な答えが、あたかも用意されていた応答かのように、なんの負いもな

くほんにと自然に出てくるあたり彼等はやはりソ連を代表する第一級のアルビニスト達だと今更その感を深くしたと同時に、自分のいわば軽卒ともいべき質問を心中忸怩として省みただけであった。

そして、「日本ではその点どういう対策をとっているか、日本にはアルビニストがどれくらいいるか、山岳会がたくさんあると聞いているがどれくらいあるのか」等々矢つぎ早やにたずねられた。

話題をかえて、私が学生時代興味をもったクリチエフスカヤ(四、八五〇m)のことや、当時出版されたステンベルクマンの探検記を読んだ話をしてみたが、カムチャツカは遠過ぎるし、それより手近かなカフカズやトランス・アライに高く手剛い山がいくつもあるからと言ってあまり興味をもたなかったようである。山ではないが、やはりその頃北極海を探検したオットー・ユリキエヴィッチ・シニツキのチェリウスキエウの本を自分話をするところでは少年時代自分達の血をいたく沸かした記憶に生々しい事件だ、彼等は英雄勲章を与えられた、よくあの本を読んでいたね」と急に眼を輝かせる。

しかし、最後に、「一九七二年はミュンヘンオリンピック、ソ連はこれに全力をそそぐ、そのため遠く山へ行くことはできないであろう。だが一九七三年はアルビニズム連盟創立五十周年にあたるので是非八千mの山をやるつもりだ、日本ではたぐさんの隊が海外へ出かけて行くが、その費用はどうやって賄っているのだろうか、更に一九八〇年のオリムピックはモスクワが立候補する、是非応援を頼む」ということであつた。

折角訪ねてくれたが別に御馳走もできないからこれを記念にと「ビークレニニ」「征服されし峰々」「ソ連アルビニズム要覧」の三冊にそれぞれ心のこもった署名を書き入れて渡された。私はそのような好意に答えるべきなものも持ち合わせなかつた。ただ日ソ岳界の発展と友好のために、と差出された三人の手をかわるがわる握りかえただけであつた。

公務という重荷を負つた旅行のなかで、こうした心暖まる一夜を楽しむことができたのは、砂漠でオアシスにめぐり合うの感といつてよかつた。

その日から一日おいた翌々晩、急に話が決まって、こんどは連盟の渉外委員長であるギッペンレイテルに逢えることになつた。一緒に晩飯をやりながら話をしよう、私の希望でウズベキスタンの旗亭に彼を迎えたい。いまだに果せない中央アジアへの旅愁を少しばかり味わつてみたいと思ふ趣向からである。

ウズベキスタンの料理屋は、さほど大きくはないが、店内の壁や、天井、どことなく中央アジア風につくられていて、来客もさすがにウズベックやトルジヤの人間が眼につく。小人数の樂師の演奏するリズムにあわせ強烈な身ぶりのダンスをウォッカの酔いにまかせてやっている。店内はムンムンした

熱気に充ちていた。テールの予約がとれない連中が門前にひしめき合い、入れる入れると喚びているのもことなくエキゾチックで面白かった。

数日前、私はモスクワの書店で「テベルダとドムバイ」という西コーカサスを紹介する本を入手した。著者はギッペンレイテルである。この日逢うギッペンレイテルは、実はこの本の著者のいとこにあたる生理学者で、とくに高所生理についての研究者として知られている。彼は数冊の本を私に見せてたいと思っ持ってきたという。その一冊は英国のハント卿の「ザ・レッドス

46年度年次晚餐会所感

伊藤秀五郎

十二月四日の年次晚餐会に何年ぶりかで出席した。会の会合にあまり久しく顔を出さなかったので、出席者の大半は未知の会員で、大げさないうと、竜宮から帰った浦島のような気がしたが、多くの旧知の会員と旧交を温めることができて、たいへん楽しかった。中には二十年振り、三十年振りにお会いする人も少なくなかったが、長老連が皆さんお元気で、最近ヒマラヤ見物の旅行から帰えられた神谷恭さんのように、八十をいくつか過ぎてなお山旅を楽しんで心温まるという消息をおききして、心で温まる思いがする。僕も若いころ山登りという道楽を覚えておいてよかったとつくづく思う。

僕が北大に入学して山を歩きはじめたのは大正十一年だったから、もう五十年になる。五十年を顧みて、僕自身山登りの収量は記録も少ないが、しかし若いころ僕たちの考えていたことをこの十五年ぐらいいのあいだに、若い世代の会員が次々と片付けてくれたことは心強い。とくに最近では、僕など考

ノウ（一九五八年英国のコーカサス遠征）であった。この本の扉に、ギッペンレイテルに捧げるという意味のハントのデヴィケイションがある。始めから活字になっていく献辞である。さすがにこいつを私に見せたときの彼の瞳は誇りやかであった。

しかしそのあと彼にこういふことを言われた。それは、彼が一年半ばかり前に日本山岳会会長宛に手紙を送ったのだが、いまだに日本宛の返事がこない。内容は高所生理についてのデータの交換をやってはどうかと提案したのだという。データがないならなくても

えも及ばなかったような困難な登山にいくつ成功していることには、手ばかりなで敬意を表している。ただ少し気がかりなのは、この一、二年、わが国の海外遠征隊から、相当多くの遭難事故がおきていることである。登山人口ではいかにいよばず、登山技術の質からいっても、わが国が、登山の先進諸国に少しも劣らない最高の水準に達したことはまぎれもないが、しかし遭難が多いことは自慢になることではない。

わが国はGNPが世界の二番目とか三番目とかになったと有頂天になっているあいだに、公害や自然破壊は他国を抜いて世界一等という有難くない結果を生んだ。これとそれは問題は別だが、山岳遭難世界一という記録は決して喜ぶべきことではない。この辺で山の関係者はじっくり腰をすえて勤務すべきではないか。そういう僕にも名案があるわけではないが、やはりもっと慎重に事をすすめる風潮が好ましいように思う。（一九七一年・二・八）

望月君の労を偲う会

山岳編集二十余年

「会の伝統を身をもってのみこみ『山岳』の編集にたゞさわって通算二

よい、そういう返事ぐらいくれてもいいじゃないかと、彼は大いに不満気であった。

東京へ帰ってから会報をめくっていたら、彼のいう手紙が二九八号に掲載されているのがみつかった。書面は会報に紹介したが返事を出すのは忘れては困る。山岳会も近來事務分量激増でなかなか行き届かない、担当の人達の苦勞は解り過ぎるほど解るけれどもメリハリだけはきちんとしておかなければいけない。

彼との話のなかで記憶に残っているひとつに、日本からは驚くほどたくさん

十数年、誠意をもってつくしてこられた一望月達夫君をねぎらう会合が、発起人五名、賛同の有志二十八名参集して、昨年十二月十四日、霞ヶ関三井クラブで開かれた。

いずこの国でも古い伝統のある山岳会は、かならず会誌を持ち、それがすぐれた内容を備えている。会誌そのものがその団体の風格を物語り、業績を示すとともに、その集積はその会の歴史でもあり、さらにそれぞれの国の登山史ともなっている。

わが「山岳」の場合も、創刊第一号（一九〇六年）いらい、諸外国のすぐれた会誌に伍するに足る内容を盛るための努力に伍するに、培われてきた。これは、その素材となる会員の登山活動、寄稿が寄与するところ多大であったことはいくらでもないが、同時に、つねにより編集者にめぐまれ、その献身的な労苦に支えられてきたことも、見のがせない要因となっている。

戦後の「山岳」は一九四八年十一月に満五年ぶりに復刊されたが、その第四十三年第一号は関根吉郎君の編集によるものであった。翌年の第四十四年第一号からは編集委員は複数となったが、編集兼発行者には、一九五四年か

んの遠征隊がでているが、それに比例して遭難事件も随分目につく、あれはどういうものだろう。ソ連では絶対起らないアプローチでの事故などは絶対起さないアプローチで起っているという。前々夜のアパロコフと平仄の合う話であったが、思いがけなく、日本へ帰って間もなく読んだUPI電の英国のロバーツの、日本遭難多発に対する警告ともいべき毎日の記事は、彼とのこういう話の直後だったのでだけにつくく私の眼をとらえたのであった。

ギッペンレイテルは私のもっていたら五八年までの四分を除いて、望月達夫君が当たっている。右の四年間も交野武一、山崎安治両エディターのもとで編集委員の一人に加わってはいただから、いわば戦後二十七年間に会員の手に渡った「山岳」の大部分は、望月君によって完成されたものではない。

望月君が手がけた最初の号は「小島鳥水記念号」であったが、まだ戦後の苦しい時代で一七八ページであった。それが第六十五年の通巻二二四号では三〇〇ページという大冊に成長している。まさに量、質ともに高度成長と称すべきであるが、この間、編集責任者としての苦心のほどは、知る人ぞ知る並大抵のものではなかったはずだ。

今回の会合は、有志によるほんのささやかな感謝の印しであったが、望月君と若い編集協力者の諸君に、今後まだまだお願いしますよという意思表示も多分に含まれていたかも知れない。（島田 巽）

出席者 伊倉剛三、大塚博美、織内信彦、川上隆、川崎精雄、川森左智子、木下是雄、小林義正、近藤恒雄、佐藤久一朗、田辺主計、丹野節雄、初見一雄、林和夫、藤井運平、藤島敏男

テベルダとドムバイの扉に「日いつる国日本のアルビニストへ、山脈は国境をつくるけれど、アルビニストに国境はない」としたため、是非日本山岳会からコーカサスの山へきてもらいたい、そのときはできる限りの協力を惜しまないという。彼の厚意に心からの謝意を表してウズベキスタンの店をあとにしたのは、クレムリンの塔の赤い星が白雪の降る黒々とした空に美しく光芒を放っているのを、印象的にみられる深夜であった。

堀田弥一、横有恒、松田雄一、松丸秀夫、武藤寛、村尾金二、山崎安治、吉沢一郎、坂本炬祥、折井健一、小方全弘、川喜田壮太郎、加藤泰安、交野武一、近藤信行、島田巽、田口二郎

テンジンの賀状

いつか羽田へ行ったら予定の時間に現わなかったテンジンから例のサインのある賀状が来た。表は末の子らしい可愛らしい坊やの写真。



岡益徳之助氏逝去 本会名誉会員岡益徳之助氏は一月九日逝去、十二日与野市下落合の自宅で告別式が行なわれ、本会から生花一对をそなえ哀悼の意を表した。明治二十二年十一月十二日生れ。大正十一年九月入会、会員番号二七一、昭和三十七年十一月本会名誉会員。

戦前まで嘉永元年創業の菓子舗を経営、明治36年富士登山六回、大正初期冠氏と秩父縦走など行なう。

「明治の山旅」を読んで

神原忠夫

年のせいとか、古いものに興味を持つようになったが、山の本なども最近の記録主義的な味気ないものより、昔の山登りを書いた本の方が、むしろ探検的なスリルを感じ新鮮で興味津々たるものがある。そういう意味で、武田久吉先生の「明治の山旅」は大変面白かった。山が好きなたら大概読書家でもあるから、大方は読まれたことであろうし、諸先輩の文筆家がいづれ一筆あるものと思っていたが、いまだにないので惜越ながら読後感などをしたためた次第である。

この本を読み始めて直ぐ嬉しく思ったのは、著者が「最初に山の気分を真近かに経験した所」が箱根であったことである。何故かという、私も実は箱根が「最初に山を真近かに経験した所」であったからである。この喜びは恰も尊敬する人の伝記などを読んでるとき、少しも自分と共通している点を発見した時の喜びに似ていて、大変愉快であった。

本書は先ず「明治百年」なる流行語に対する批判で始まる。そこでは、感傷的にのみ明治を顧みず、明治の良さを究め、現代に生かせるという痛烈な著者の希求が感じられる。それは著者が今日まで叫び続けて来た、スローガンともいふべき性質のものなのである。

著者が最初に登った山は「輕節を立ててならべたような妙義山」で、明治二十八年(十二歳)の八月であった。「明治の山旅」はかくして始まり、明治四十二年七月の北海道内植物採集旅行で終わって、その最初の山旅での帰路、道連れとなった男が実はゴマのハイ(盗賊)であったのも知らず、一緒に霧積温泉に泊っているが、その

男の如何にも親切風な仕ぐさ、やはり明治風で面白いと思つた。

著者は名だたる植物学者だから山旅の本といつても、植物に関する記述が多くなるのは当然であり、その面での知識や話題を豊富にしてくれるのは、大変有難いと思わなければなるまい。そのひとつとして、私は千葉県に生れながら、当時植物の宝庫として清澄山が有名であったなど、今日まで全く知るよしもなかったが、本書によって発見されたキヨスマニコケシノブが、後年榛名に次いで日光において著者が発見し、それが機縁となって大植物学者、牧野富太郎博士と相識るに及んだ話など、著者にとつては取っておきの話のひとつではなからうかと、私の胸も湧く思ひがする。

本書によれば、ツクモグサの発見で有名な城数馬さん(本件については藤島敏男著「山に忘れたバイブ」三三八ページおよび山岳第六十二年の藤島敏男筆「會員第一号城数馬氏のこと」七ページに詳記あり)が訪れた明治三十年(一九〇二)頃の八ヶ岳は、植物採集で一寸したブームであったらしく本沢温泉はそのために新築をしたとか細かく記述されている。驚いたのはこの温泉に自家発電装置があったことである。勿論、今のようには内燃機によるものでなく水車による発電であるが大雨が降ると、水車は止ってしまつて停電したというから、また妙である。

著者は明治三十六年(一九〇三)七月に初めてこの山に入り、赤岳付近で「タカネシダ」の発見をしている。高山植物の宝庫といわれる八ヶ岳だけに記述も微に入り細にわたつていて、この部分は本書中の「ピーク」といった感じである。二十年後に同じ八ヶ岳を訪ねた著者は、少なくなつた植物に驚き警句を放つておられるが、想像に難く

ない。

中央線が甲府までしか通じていなかつた頃の甲斐駒登山も仲々興味深い。著者が甲斐駒を訪ねたのは前記八ヶ岳と同年の明治三十六年八月でありこの頃既に屏風小屋には寝具もあり食事も出したとあるから、これまたいささか驚いたが、信仰登山で栄えた山であるから考へて見れば不思議でも何でもないであろう。同宿の行者に怪しまれ、一草(グルマリ)を示してその名を問われながら、実に愉快に極である。この小屋から頂上まで三時間一分で登つていけるが、かなり早かつたと思う。それも植物を調べながらである。私など脇目も振らず四時間掛かつたものである。

明治三十八年(一九〇五)七月八日いよいよ尾瀬の探検が始まる。戸倉の部落から、人ツ氣の全くない鳩待峠まで五時間半費している。如何に行路の困難であつたかが想像される。そこは「水の滲み出るような緩傾斜地で、所々にスゲの類などが生えていた」峠であつたというから、今の鳩待峠しか知らない者にとつて、隔世の感があるわけである。当時の尾瀬ヶ原には、山の鼻にゼンマイ採りの小屋があり、尾瀬沼の丈堀といふところ(現今見晴し)と称されている地点らしい。には、松枝岐の漁夫の小屋が三軒あつた。その道の悪さは並大抵ではなかつたのであろう。沼尻には樫ヶ嶽神社を祀つた堂小屋があり、壁に落書があるのは今も昔も同じらしいが、墨にて短歌などが書きつけられていたとは、風情のあることである。

同じ年の八月初め、著者は富士山に登つている。一目から頂上まで六時

間とは、またまた馬力のあることである。頂上の賑わいは当時も相当のものだつたらしいが、頂上浅間神社の捺印ひとつ捺し一銭は、今日の五十円と五千倍に捺している。

白馬行も大変であつたらしい。雨で落ちた橋を材木を買わせて修理させたり、昆虫採集の網で蠅狩りをしたり、まるで未開地の旅さながらである。この山行では十八日の期間中一日も雨に降られ、頂上付近の避難小屋では十二日間も滞在し、その間晴れたのは僅か二日という悪条件と聞いただけ採集を続けたそうであるが、その頑張り方には頭の下る思いがする。

「頂上の着いたのは五時五十五分、ウメバチソウと、ことにウスキソウの大群落は瞠目に値する光景であつた。その真只中に小さい石祠が一基淋し気に立つていた。……これは明治三十八年九月二十四日、丹沢塔ノ岳頂上の有様である。皆さんも存知の現今の風景と比較して昔を偲びたいものである。今はない孫ひの岩の写真も珍しくこの項は八ヶ岳、白馬岳の項と共に、本書中もつとも印象深い記事であると思う。

本書は、昭和四十六年六月十日、創文社から出版されたが、私は全く偶然にもその前日、市内某所で著者とめぐり会い、親しく語る機会を得ると共にこの出版を知つた。著者によれば、昨年三月には五十年にわたる調査研究の成果として、「路傍の石仏」なる大著を第一法規出版から上梓したとのことでもあり、その健闘振りには唖驚の極みでもあつたが、また大いに激励される思いでもあつた。

地に咲く花に手をさし、風雪に耐えて屹立する大樹を仰ぐ眼なざしと全く同じものであると想像する。それは著者が九十年にわたつて自然人文に対して注いで来た、深い愛情の眼なざしである。私たちはこの心を、著者の書物を通して汲みとらねばならないと思ふ。

「多勢で山に登るな」と著者はいわれる多勢の心が問題である。更により問題なのは一人の為政者の心である。一人の為政者の心は往々にして多勢の人の心よりも、大きな破壊力を示すことを私達はしばしば経験して来たことである。

さて本稿も終りとなるので本書の造本などについてご紹介申し上げ、参考に供したいと思ふ。

「明治の山旅」はA五版二七六ページ、堅牢な角背、濃緑の落着いたクロース装、函入の普及本(一五〇〇円)のほか、丸背民芸和紙装、天金、肉筆署名、特製紙入の限定一〇〇部愛蔵本(八〇〇〇円)があり、愛蔵本の見返しには赤地の和紙に金で著者のスケッチが印刷されているほか、著者による高山植物ミヤマチドリスケッチ(印刷されたもの)が一葉挿入されている。本書に掲載の写真はすべてモノクロームによつてはいるが、標題からしてかえつて好感が持てる。しかしながら普及本外函の写真は、いささか煩しい感じであつたのを惜しむものである。

山日記一九七二年度版

山日記一九七二年度版が発売中である。「登山のために」、「山と人」、「登山案内」の三部にわかれ、とくに「山と人」では、榎有恒、今西錦司、西堀栄三郎氏らのプロフィールをしるし若い人には大変参考にならう。定価七百五十円。ルームで一割引発売中。

深久田弥著作展目録①

深田久彌さんとこの一本展

この催しも回を重ねて十年目となる。提案者は深田久弥さんでこの一本展という名称もいかに深田さんらしい発想である。さらに会員に呼びかけた案内状の草稿も自ら筆を執られこれも深田調ともいえる簡潔な簡条書き的なものである。その原文の概要は次のとおりである。

記

1 山に関する蔵書の中から、珍本、秘本、稀本、署名本、何でもよろしいが、この一本々と思われれるものを一冊お持ち寄り願う。

2 「この一本」は年次晩餐会当日ご持参し、一般展覧の上、会后お持ち帰り願う。

3 ご出展の「この一本」に関する随筆一篇(四百字原稿用紙二枚以内)をお書き願う。

4 原稿の最初にご、随意の題名とご姓名をお書き願う。

5 整理の都合上、原稿は書名、著者名、発行所名、発刊年度と共に〇月〇日までに日本山岳会図書委員会宛お送り願う。

6 晩餐会当日、出品目録と五項の原稿をまとめて印刷の上、参会者にお配りする。

幸い第一回より好評をいただき、毎年各地に雪の便りを耳にする頃になると、「今年の一本展はどうなっているか」との問い合わせを会員諸君から受けるまでになり、年次晩餐会に欠かせないものの一つとなった感がある。本年で十回目となるので、何か特別の企画でもと、昨年あたりから図書委員の間で話されていた矢先、この三月の急逝で、はからずも記念すべき十周年のAこの一本展を提唱者である深

田さんを偲ぶ催しになったことは、最初からずっとお手伝いをして来た者として何とも筆舌に尽せぬ感慨をおぼえる。

この催しを通して、いくらかでも深田さんの大人らしい風情のない温顔を偲んでいただければ幸いです。最後にAこの一本展十年の足跡を簡単に記してみました。

△第一回▽昭和三十七年十一月二十五日 茗溪会館 出展者十九名、深田氏出品(Tintin au Tibet Herege (コマヤラの漫画の本)) 出品目録、会報二二四号参照

△第二回▽昭和三十八年十二月三日 茗溪会館 「志賀重昂生誕百年記念」山岳会の大先輩の著書、書簡、筆跡、愛用品等多数。

特別に志賀先生ご子息志賀富士男氏をお招きしたこと、会員森(旧姓加藤)元一氏の尽力で、岡崎市役所管理の南北亭旧蔵になる先生の愛用品が注目された。出品目録、会報二〇〇号参照

△第三回▽昭和三十九年十二月二日 茗溪会館 「高野鷹蔵氏を偲ぶこの一本展」同年九月に亡くなられた氏を偲び遺品、著書、愛蔵書、関係文献多数。出品目録、会報二二七号参照

△第四回▽昭和四十年十二月三日 三井ホール 「槍ヶ岳文献展」マッターホルン登頂百年の行事がヨーロッパで催されたのに因み、日本のマッターホルン槍ヶ岳展というこでの催し。出品五十三点、出品目録、会報二四八号参照

なお同時に企画され、都合で印刷できなかつた山崎安治氏による「槍ヶ岳登山に関する主要文献抄並びに解題」は会報二四八・二五〇号に掲載。

△第五回▽昭和四十二年十二月二日 八芳園 出品十六点(この回より出品目録解題印刷)

△第六回▽昭和四十二年十二月一日 伊勢丹プリムラ 「明治百年山岳圖書展」明治百年にちなんで行なわれた催しで、明治年間の圖書にしほりほとんどが会員小林義正氏の蔵書であった。(出品目録印刷) 会報二七二・二七三号参照

△第七回▽昭和四十三年十二月六日 マツヤサロン 出品二十二点、出品目録、会報二八三号参照

深田氏出品「印度撮影帖」は明治三十七年本願寺発行の大谷探検隊の記録。「ラカボシやパツラ水河の写真はカラコルム早期のものとしては世界でも珍しいものであろう」と深田氏は解題で述べておられる。

△第八回▽昭和四十四年十二月五日 マツヤサロン 「エヴェレスト関係図書展」エヴェレスト登山にちなんで催し。深田氏出品 Jan Serrallier: Everest Climbed 一九五三年登頂成功に対して献じられた長詩。

△第九回▽昭和四十五年十二月十二日 マツヤサロン 出品十四点、出品目録、会報三〇七号参照

深田氏出品、チベットの大きな本と小さな本 Samuel Turner: An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama, in Tibet. Fred-eric Shoberl (ed.): Tibet and India beyond the Ganges, London, 1823

△第十回▽昭和四十六年十二月四日 マツヤサロン 「深田久弥著作展」(大橋 晋)

深田久弥著作展

出品目録および解題

深田久弥さんは、三月二十一日、甲州茅ヶ岳において忽然として逝去された。幼少のころから深く山を愛し、国内の山々はもろんのこと、世界各地の山岳の研究にその六十八年の生涯を捧げられた。また本会の図書委員長としてAこの一本展を提案され、みずから推進者として年次晩餐会に花をそえられたことは、われわれの記憶にあらざるところである。

今年、はからずもAこの一本展の十回目にあたる。図書委員会では生前の深田さんの温顔と威徳を偲んで、山岳書を中心に「深田久弥著作展」を企画し、左記の著作物を展示することにした。展示内容はつぎのとおりである。

(一) 山岳図書(著作、講座・編者・解説、翻訳)

(二) 小説・随筆

(三) 主要寄稿雑誌

(四) 原稿・筆跡・書簡

(五) 手沢品その他

(六) 写真

日蓮峰・大鳥池「加賀の白山」至仏山を越えて尾瀬へ」など二十九篇を収める。深田さんが山岳紀行文を書きはじめたのは、新進作家として文壇に登場した昭和五年以降のことだ。ここには少年時代のふるさとの山の印象が語られ、学生時代の山旅(大正十一年、燕・常念・槍・上高地など)の感動が綴られていてAわが山山Vの表題にふさわしい初々しさがある。跋文に「別に学問的な研究もなければ輝かしい登攀の記録もない」と著者は書いているが、このころから山と文学が氏の中心命題となるので、その点、本書は深田文学を考える上で重要な意味をもっている。「文学界」二巻二号(昭10・2)に宇野浩二の批評文がある。

東峰書房版(23・7)、河出書房版(31・8)、あかね書房版(日本山岳名著全集8、37・11)の三つの異版がある。

山岳展望 昭和十二年十一月 三省堂 A5 判 本文三三三頁 写真別丁十五葉 装幀・谷口喜作 二四七十銭

著者は一高在学中、木暮理太郎氏の講演を聞き、その山にたいする真摯な態度に大いに啓発されたと言っていたことがある。表題になった「山岳展望」では、木暮氏の「東京から見える山」を暗記するほど熱し返し読んだとい山岳風景観賞の樂しみを語る。「乗鞍岳スキー行」「鹿島槍岳」「光岳」「万葉集の山の歌」など二十九篇を収める。

山の幸 昭和十五年十二月 青木書店 A5 判装型 本文三五五頁 写真別丁十二葉 装幀・谷口喜作 三三〇銭

深田さんは故郷の白山に終生かわらぬ愛情をもちつづけていた。昭和十四年、父を喪い、野辺送りの日、「八十三年の生涯を殆んどこの故郷の町に終始した父を憶い、僕は一しほの感懐をも

ってつくづくその白い山を眺めた」と書いてあるが、白雪皚皚たる白山を仰いだときの感動を晩年にいたるまで語っている。「北に遠ざかりて雪白き山あり」という「平家物語」の一節は氏の愛語句の一つだが、この雪白き山とは著者にとって入ふるさとの山V白山にほかならなかった。山にあることの幸せをひしひしと訴える紀行随想集である。「春の山」「大河原峠」「氷雪の富士山」「南アルプスの一角」など二十三篇を収める。なお「山の悲劇」にはワインバーのmatterホルン登攀、マロリー、アヴィンのエヴェレスト登攀についての記述がある。

山頂山麓
昭和十七年七月 青木書店 A5
判 本文三一頁 写真別丁七葉
装幀・谷口喜作 三円

「雁南の山旅」(霧島山・開閉岳・屋久島・桜島山)を巻頭に紀行随想十七篇を収める。日本各地の山々を訪ねて一文学者の眼でそれをすべて書き残したいとの念願は、前者からあらわれているが、昭和十四年十二月、はじめて九州の山々に足跡を印した。このような幅ひろい山旅は「文学界」その他での「日本の名山」執筆につながっているが、「これから僕も歴史や博物を勉強して、日本の山をもっと広い見地から眺めたい」と言うように、著者の山を求めることが卒直にあらわれている。しかし本書刊行のころは、太平洋戦争の非常時に突入していた。「スキー談話」「島海山の春」「心残りの山」等のほか、「ナンガ・バルバットの登攀」ではドイツ遠征隊についての記述がある。

山岳紀行
昭和十八年十二月 新潮社 文庫
判 本文三一六頁 六三銭
「僕が山に熱中しただしたのは中学生の時であるから、もうかれこれ二十五

年になる。山はもう単なる趣味ではなく、身から離れたいものになっていく」と序文にあるが、本書は過去十年間の文章のなかから十九篇を選び、一年十二月の順に編集したもの。塔ヶ岳、吾妻山、八幡平、富士山、白馬岳、巻機山、美ヶ原、会津駒ヶ岳、木曾駒ヶ岳、朝日連峰、白山、八甲田山、光岳、甲斐駒ヶ岳、焼山、至仏山、荒船山、開閉岳、乗鞍岳を収める。

をちこちの山
昭和二十七年五月 山と溪谷社
B6判 本文二二七頁 装幀・山川勇一 二〇〇円

戦後はじめての紀行随想集。二十二篇を収録。著者は昭和十九年三月応召中国湖南省を転戦、二十一年七月に復員した。帰国後、湯沢に居を定めたことは「湯沢の一年」(山さまさま)所収)にくわしいが、まもなく大聖寺・金沢に転じたが、本書の刊行は金沢時代になされたが、「昔風ヒュッテ」「ニセオアシブリ」「七面山」「雪山の幻覚と幻影」などをのぞいて、みな戦時下の文章である。登山の楽しみをうづわね、練成道場風の団体行動が要求された当時であったが、その後も「大ていはたつた一人か、二人連れて、うるさい世間から逃れるような、ささやかな登山ばかりである。僕はその山登りをひそかに続けていた」と書かれているように、中央の文壇から遠ざかった著者の孤独な一面をうかがうことができる。と同時に「日本の名山」(文学界)「昭三連戦、中断」の表題のもとに書かれた男体山、石鏡山、妙高山などが収録されていて「日本百名山」の原型を読むことができる。

ヒマラヤ山と人
昭和三十一年七月 中央公論社
四六判 本文四〇八頁 写真別丁十八頁 地図別丁一葉 装幀・中井幸一 一五〇〇円

深田さんがヒマラヤに興味をもちはじめたのは戦前のことだが、金沢在住時代から諸外国の文献を集めはじめ、それを耽読して「氷雪の高峰に思いをやるのが、田舎暮らし数年間の私の無上のたのしみであった」という。騎士物語を耽読しすぎて冒険遍歴の旅に出たドン・キホーテにみずからをたとえたほどであった。それが「岳人」誌上に「ヒマラヤ机上小説」の連載(28・6以降)となり、さらに「ヒマラヤ雜記」「ヒマラヤ七千m級の山山」「ヒマラヤの高峰(二九山房夜話)」という大きな仕事となつてあらわれ、ジュガールの旅に発展する。

本書はヒマラヤ研究の第一の成果というべきもので、ヒマラヤ概観、名山考、ジョージ・リー・マロリー、エヴェレストあれこれ、登頂年代記、小エクスペディション、シェルパ列伝、ヒマラヤの墓碑銘など、膨大な文献の調査をとおして「山と人」を語っている。深田さんのヒマラヤ研究の、いわば原点である。扉には「私と同様ヒマラヤの経験はなかったが、誰よりも先にヒマラヤに情熱を持たれた故木暮理太郎氏の霊に捧ぐ」という献辞がある。著者はこの刊行直後、金山でひらかれた木暮理太郎前祭にはせま参じて、本書を翁のレリーフの前に捧げた。それは敬愛してやまなかった恩師にたいする感謝の念にほかならなかった。

四季の山登り
昭和三十一年七月 社会思想研究会出版部 文庫判 本文一八八頁 写真別丁四頁 九〇円

昭和十八年刊行の「山岳紀行」をあらたに編集し、春夏秋冬の各章に紀行文十五篇を収める。穂高、槍ヶ岳、谷川岳などは戦後の執筆。本書のたゆむが国の自然が四季の移り変わりによ

って、いかに微妙な陰翳に富み、それが国民性に影響をあたえ、文学にあらわれているかを述べる。

「日本には世界に高さを以て誇るような山はない。しかしその姿の美しいこと、しかもそれが無限の変化や陰翳を帯びていることは、おそらく地球上に類がないのではなからうか。この東海の小きな島国の民族が、その美しい自然と共に、美しい精神を持っていることは不思議ではない。」

水秀水清
昭和三十一年十月 朋文堂 B6
判 本文二七七頁 写真別丁十六頁 著者写真一葉 二八〇円

コマクサ叢書第三巻(函には四とあるが誤植とおもわれる)として刊行された紀行文集。旧著「わが山山」「山岳展望」「山の幸」「山頂山麓」をちこちの山」とから二二篇を再録。表題の山秀水清という言葉は、著者が中国湖南省を進軍中にみつけた碑文の一節で、山秀で水清しと読んでいたのだと序文に記されている。

ヒマラヤ登攀史
昭和三十一年七月 岩波書店 新書判 本文二二四頁 写真別丁二頁 地図別丁一葉 挿絵・山川勇一郎 一〇〇円

ンガ(イギリス)、マナスル(日本)、ローツェ(スイス)、ガッシュアルムII(オーストリア)、ブロード・ピーク(オーストリア)のほか当時未登頂であったウラギリ、ヒドン・ピーク、ゴサインタンなど十四座について書かれ、終章「ヒマラヤ未来記」にはヒマラヤニズム到来の予見がある。深田さんは「山の好きな元氣な若い人々のヒマラヤへの煽動の書」となれば本望だと言うが、ヒマラヤ研究に情熱を傾けた著者を得てはじめてなした一書である。

第二版では全面的に改稿がほどござれ、序章「なぜヒマラヤに登るか」は「ヒマラヤへの遙かな道」となり、終章「ヒマラヤ未来記」は「日本人のヒマラヤ登山」に書きあらためられている。(近藤信行)

◇ハーマニ力渡る◇
井口 昌幸
(在ネパール・日本大使館)

今年四月小生一時帰国して帰任の際托送を受けましたハーマニカ一箱、本十一月五日、エドモンド・ヒラリー卿に当館において手交致しましたので報告いたします。

小生帰任して直ぐ英国大使館に連絡したのですが、今までのままになっており、本日漸く貴兄より依頼された案件を果した次第です。

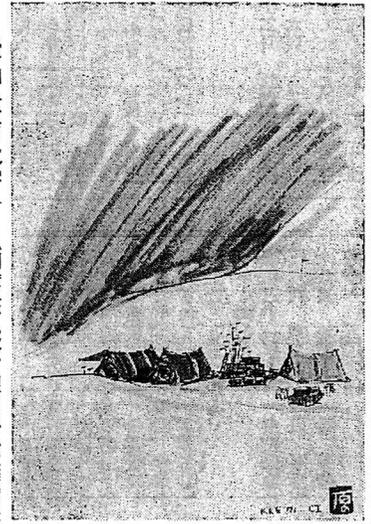
今年は大候不順で、登山隊の事故続出、閉口しております。47年度ブレモンスンには二十隊以上が申請を出しているとのこと。思いやられます。登山隊の規制(質量とも)について真剣に考慮すべき時機に来ていると考えられます。山岳協会自体も何とか考えられないものかと思えます。

取急ぎ要件のみ。
昭和四十六年一月五日
(神原克)

昭和十八年七月 中央公論社
四六判 本文四〇八頁 写真別丁十八頁 地図別丁一葉 装幀・中井幸一 一五〇〇円

1971年のヒマラヤ

A プレモンズーン



11 愛知教育大学 西アジア調査隊 バウダニ登 (六六七二m)

隊員、仲井豊(隊長、37)、花井俊彦(登攀隊長、36)、伊藤顕正(35)、伊藤紀道(30)、杉浦勝美(25)、徳島和男(25)、井上茂樹(21)。
結果、南面より新登頂、松浦等三名(412)、花井等三名(413)。
(略図、写真等はいずれ紹介)

12 松本登高会 アピ(七三三三m) 試登

隊員、福沢勝幸(隊長、30)、高橋正幸(副隊長、28)、新井祥之(28)、津留宏信(28)、阿南皓之(27)、松本勝行(26)、渡辺博(24)、市川良治(20)。
結果、南面から攻めて五六〇〇m(C2)まで登ったが、厚水、雪崩、吹雪で放棄。西壁に転向し、西稜上六〇〇〇mに達したが悪天で退却。ナンバを申請したが不許可。その東面の谷を探って戻る。

13 富士宮山岳会

プモリ(七一四五m) 試登
隊員、望月喜儀(隊長、42)、富士勝

(副隊長、32)、望月忠(登攀隊長、29)、後藤順啓(32)、加藤三郎(26)、増田信義(26)、針ヶ谷政志(26)、佐藤雄次(25)、松村修(28)、篠原賢一(23)、佐野弘幸(24)、渡辺武彦(26)、望月生持(22)、板倉勉(29)

結果、南面で大五〇〇mまで。病人として旺なことは認めるが、ネパールでは余り評判が良くないことを御存知かな。

14 南部山岳会 (青森県) デオ・ティバ(六〇〇一m)

隊員、松田要悦(隊長、28)、松館正義(26)、村山延久(25)、森三義(21)。
結果、ヒマチャール・ブラデッシュ・ヒマラヤのバランサル(六五〇〇m)及びドリカント(同高)を組むたが不許可になったのでデオ・ティバに転向。松館とブー・ドルジェが登頂した。(528)。

ヒマラヤにおける七一年プレの隊は以上一四隊となっているが、見落しがあつたらお知らせ願いたい。
なお、女性ばかりのトレッキング隊のあつたのがわかつたので紹介しておく。

名称は「日本婦人ネパール親善踏査隊」。隊員は黒石恒、谷口喜久子、森永貴子、山崎和子、橋本しのぶの五名。総てエデルワイス・クラブの会員だが個人的のものという。26カトマンズ、323同発、ナムチェ、E.V.B.C、テシラプチャ、往路戻り、ルクラより空路カトヘ。悪天のためロールワリンへ入れず残念とのこと。(吉沢)

UIAA.....

.....について

UIAA 即ち Union Internationale des Associations d'Alpinisme は一応「国際山岳連盟」と訳しておいたが、正確には「山岳協会国際連合」となろう。その目的や事業はあとで規約を紹介する時に出てくるので、ここでは触れないが、創立されたのは一九三二年八月二十七日であった(シャモニー)。

年次総会は大戦中を除いて、一九三四年(ポントレシナ)以来、毎年ヨーロッパのどこかで開かれているが、私が出た一九六八年のロンドンのが二六回目、田村俊介君に出てもらつた六九年(プラハ)が二九回、その後、クレイタ、ザンバーネと続き、今年はまだスイスのインターレーケンで開かれようとしている。ここで開かれるのは二度目である。韓国山岳会も最近入会を承認されたらしいので、それが出て日会からも行くとなれば、東洋人は二人以上ということになる。

次号からはヒマラヤのポストにおける日本隊の動向を紹介していこうと思っているが、その順序は次の通りである。

- ・千葉大学東ネパール学術調査登山隊(マカルーII)
- ・九州大学山岳会(ダララギリV)
- ・長野県山岳協会隊(ガンガブルナ南面)
- ・大阪府山岳連盟隊(カンジロバ・ヒマール東部)
- ・東京山岳クラブ(カンデ・ヒウンチュリー)
- ・日本アンナブルナ・ヒマール隊(ニルギリ、但し詳細未詳)
- ・千葉工業大学隊(アンナブルナ南峰東稜)
- ・岩峰登高会(八王子、チョンラ・ビーク)
- ・慶応大学隊(メントサ峰)
- ・東京薬生会(ハヌマン・ティバ)
- ・東京農大(シッケル・ムーン)
- ・日本ヒマラヤ山岳協会(カシミール)
- ・名城大学隊(カシミール)

現在の会長のアルバート・エックラーも、西ドイツ在住のグルーバー博士オーストリアのデイムベルガー親子バルセロナのアングラーダ、ラグビーに在るタイソンなども、もう私が来るものと考えているらしいが、こちらはそう簡単にはいかない。何しろ一年間の月給を棒にふるなければならぬからだ。それにしても日本登山界の海外という仕事は、時間と金のぬかるものである。

第三項 a、UIAAは一般的意味において登山に関連するもの、特に国際的な性格をもつ総ての基本的問題を研究し、解決することを目的とする。その活動は国際的な範囲における登山の発展に指向される。

b、UIAAは、各国の登山団体とその指導的個人との間に、友好的並びに緊密な協力精神を以て永続的な関係を作り出すことに努める。この目的のためにUIAAは各国の登山家達の遊進を鼓舞し、また登山に関係ある国際的な報道と事業に発言を行なう。

次はカラコルム、そしていよいよヒンズ・クシュと続くが、前者は次の三隊である。

- ・京都KC隊(マルピティン)
- ・立教大学理岳会(ピアフォ)
- ・市川山岳会(K12)

日本の登山界には私のことを、原稿料や印税をもらい稼いでいるからプロだと勝手に思っている人がいるということに耳にしたが、私はそういう人に私の後継者になつてもらいたいのだと

思っている。勿論、頭のある人はそんなことを言う筈がないから、後継者としても時間と金の面だけではあるが、いずれにしてもここまで来たらもうやめる訳にはいかない。人が何と陰口をたたこうと死ぬまで横文字と闘い、タイプだを大きくし、原稿用紙を汚し続けて行くつもりである。

話しがやや横道にそれたが後々の参考までに、少しずつUIAAの規約を紹介していく。(吉沢)

この地図は會員、宮森常雄氏が最近
 ●●●●●●●●●●
 サラグラール及び
 ランガールを中心
 としたカムカルテ
 ●●●●●●●●●●
 宮森常雄

一月に作ったもので、サラグラール
 とランガールの両山塊に残っている疑
 問点を可成りの程度解明した。欧
 米のヒンズー・クシュ研究者がこれ
 見たら必ず驚ろくであろうことを私

は保証する。
 宮森君がこの頃夢中になってやっ
 ている山座の同定(比定ともいい)は、
 言ってみれば女人裸足ともいよいよ
 程のものと思うが、そのお師匠さんは

田中栄蔵君が第一、それからポーラ
 ドのイェルジー・ワラとか、オースト
 リアのG・グルーバー博士、スイスの
 G・O・ディレンフルト老といったと
 ころであろう。



今度私は宮森君に頼んでその研究の
 成果を、写真やスケッチや地図と共に
 次号の「山岳」に発表してもらったこ
 とにした。ここに紹介するのはその論
 文のサワリともいへばところである
 が、地図の1〜9までがサラグラール
 10〜16がランガールの領分である。

- | | |
|------------------|--------|
| 1) Saraghar Main | 7349m |
| 2) " Central | 7330m |
| 3) " South | 7307m |
| 4) " N-W | 7300m |
| 5) " S-W-α | ~7200m |
| 6) " S-W-β | ~7250m |
| 7) " S-E | 7208m |
| 8) " West | 7000m |
| 9) " North | ~7040m |
| 9) (Nioghi Zom) | 6600m |
| 10) Langar Main | 7070m |
| 11) " S-E | 7061m |
| 12) " Central | 6850m |
| 13) " South | ~6850m |
| 14) " North | 6750m |
| 15) " S-S | 6700m |
| 16) " West | 6600m |
- 高度の前の印はその高度より実際は
 低いだろうと思われるもの。あとに
 がついているのは実際はもっと高いと
 思われるもの。

地図を見てもわかる通り、結局、サ
 ラグラールの頂上にある大きな雪田の
 分水線は、思ったより西に片寄って
 いて、5峰と4峰を結ぶ線あたりに
 なるらしい。山の上には思わぬ地形が隠さ
 れているものである。
 そして宮森君は、影しい写真と地図
 と登山記などの研究によって、地図に
 ない新峰(2と16)を発見し、未登峰
 を四つ(4、6、12、15)探し出した
 のである。何とも呆れた執念の登山家
 と云えよ。

(吉沢一郎)

図書紹介

クマの本

加納 一郎

北海道の山がにぎわうようになってクマの事故が多くなるのもやむをえないことだが、そのなりゆきを考えてみると、地元の人ならば一年ちゅう、クマのニュースになじんでいて、だれでも多かれすくなかれ、その習性などを耳にしている、知らぬまにインフォメーションを蓄積しているのひきかえ、津軽海峽をわたってきて、いきなり山にはいる人には、ふだんからの、こういう積みあげがないために、たといクマがいるぞとおしえられていても何かと勝手ちがいの行動に出て、思いもよらぬ悲惨なことになる。

いったんクマが目をつけた食料入りのリュックサックを、もっていかれます、とりもどしたために、執念ぶかく追いつめられて落命するようなことになる。クマのほしがるものを投げあたたえながら退却するという戦法をとっていたら、うまくのがれおせたらうにというのが、経験をつんだ人の意見である。

そんなわけで北海道の山に登るのには、ぜひともクマについて心得ておかねばならぬのだが、これまではそれについて適当な手引き書がなかった。昨年の夏、はからずも二冊の本が出たのでここに紹介する。

で、いずれを甲乙とときめかねる出来ではあるが、とにかくまじめによくまとめてあるから、何も知らずに、手ぶらで乗りこむよりは、どちらか一冊くらいは目をとっておくようにおすすしたい。

会費未納の方は大至急お納め下さるようお願いいたします。

図書室便り

(昭和46・12)

- 新刊図書受入報告
(昭和46・12)
文芸春秋寄贈
(1)谷口正彦著『雪男をさがす』 昭和46
(2)浦郡山の会寄贈
(3)山とスキーの会『山とスキー』 第16号/100号 大正11/昭和25
(4)高橋文太郎著『山と人と生活』 昭和18
(5)柳田国男著『信州随筆』 昭和11
(6)山本徳三郎著『山の幸』 大正10
(7)伊那昔話集』 昭和18
(8)山と雪の会『山と雪』第一巻』 昭和25
(9)渡辺兵力著『山・スキー・みち』 昭和40
(10)木暮理太郎著『中央亜細亜の山と人』 昭和19
(11)東京帝大スキー山岳部『部内雑誌』 昭和32
(12)成蹊高等学校旅行部『記録』第一号 昭和32
(13)慶応山岳部『登高行Ⅶ』 昭和4
(14)東京歯科医科専門学校山岳部『杖痕』 昭和8・10

- 深田志げ子氏寄贈
(1)深田久弥著『中央アジア探検史』 昭和46
(2)深田久弥著『山頂の憩い』 昭和46
(3)伊藤秀五郎著『草原随想』 昭和46
(4)陰地章氏寄贈
(5)木本光三郎編『吉野郡峯』 大正6
(6)井口正男氏寄贈
(7)佐藤一栄編『わが越後の山』 昭和46
(8)定期刊行物受入報告
(9)『部報』会報類
(10)長崎山岳会『あしあと』 (46-12)
(11)山村民俗の会『あしなが』 No. 130 (46-12)
(12)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 55 (46-12)
(13)京都山岳会『京都山岳』 No. 50 (46-12)
(14)東京野歩路会『山嶺』 No. 500 (46-12)
(15)札幌山岳俱樂部『部報』 No. 85 (46-12)
(16)日本自然保護協会『自然保護』 No. 114 (46-12)
(17)東京池路山岳会『たろ』 1971年号 (46-12)
(18)低い山を歩く会『低山』 No. 78, 79 (46-12)
(19)横濱山岳会『山』 No. 471~474 (46-9~12)
(20)日本登山協会『山と雪』 No. 164 (46-12)
(21)独標登高会『独標』 No. 119, 129, 130, 131, 132, 133, 134 (46-2, 3, 5, 7, 9, 11)
(22)別冊『昭和41年11月富士山屏風尾根遭難報告』
(23)漢国山岳会『山』 (1971-3, 6, 9)
(24)『雑』
(25)『アルプ』 No. 167 (47-1)
(26)『岳人』 No. 295 (47-1)
(27)『岩と雪』 No. 23 (46-12)

わが越後の山

新潟県の登山界を担う岳人二十余名が、上中下越・佐渡と、それぞれホームグラウンドの山に抱く憧れと歓び。その心を魅了してやまない越後の山々の、四季の美しさ、楽しさ、そして厳しさを飽くなく追究する、爽やかに量感あふれた山の本。

A5 版本文五二四頁
写真 四五頁
特製本 上製箱入
限定一五〇〇部出版
¥ 二五〇〇円
〒 一七〇〇円
発行所 学生書房

951 振替 新潟 八四九
TEL (025) 31365
新潟市営所通一番町
新潟県境
全縦走踏登山の記録
越後 6
越後の国境
A5 版本文五二四頁
写真図版地図四五頁
¥ 一五〇〇円
新潟県映彩山岳会会報11号
(一月発行) 頒価六〇〇円
〒一〇〇円

- (4) 『山と溪谷』 No. 400 (47-1)
- (5) 『創文』 No. 102 (46-12) [その他]
- (1) 日本山岳会信濃支部『アンナブルナ登山計画書』72]
- (2) 雪標山岳会『フタ・ヒウンチャリ峰登山計画書』72]
- (3) 名城大学『カンニールからスモートく71』
- (4) 福島食糧会津山の会『いなほ』創刊号
- (5) 中野山岳会『中華民国台北市魚市場訪日登山隊友好親善報告書』
- (6) 山のなかま同人『ヘルループンデス遠征隊登山計画書』72]
- (7) 日光東照宮『日光杉並木街道の現状と問題』
- (8) えぞ山岳会『夕張岳・声別岳縦走ハイライ遭難報告書』
- (9) 山岳文化社『山』(1971-9, 10, 11) Journals Arrived in December 1971
- 1. "Alpinismus" 1971-11.
- 2. "Appalachia bulletin" vol. 37, No. 9 October 1971.
- 3. "Der Bergesteiger" 38 Jahrg. November 1971.
- 4. "The Canterbury Mountaineer" vol. 12 No. 40 1970-71.
- 5. "Mountain" No. 17 September 1971.
- 6. "Rivista mensile" Anno 92 N. 9 Settembre 1971.

- 5. F. F. Roger "Ski-runs in the High Alps" 1913.
 - 6. Davide Giudici "The Tragedy of the Italia" 1929.
 - 7. Henri Ferrand "La Route des Alpes" 1925.
 - 8. Norsk Polarklub "Polar-Arthoken" 1936, 1937, 1938, 1940.
- 地図受入報告
孫慶錫氏寄贈
- (1) 『漢拳山―登山・ハイキングシリーズ①―』 昭和46
 - (2) 『雪嶽山―シリーズ②―』 昭和46
 - (3) 『内蔵・白岩山―シリーズ③―』 昭和46
 - (4) 『俗離山―シリーズ④―』 昭和46
 - (5) 『徳裕山・茂朱九洞―シリーズ⑤―』 昭和46
 - (6) 『辺山半島―シリーズ⑥―』 昭和46

図書委員会報告
12月8日 午後7時 談話室
山崎、近藤、堀内、荻野、大橋、伊藤、蒲野、横山、野上

1 図書室利用規程の件
2 「山岳」創刊号復刻の件
完成は一月下旬の予定
3 図書委員会懇親会の報告
4 その他
「山岳」図書を語る夕べ」
二月二十四日(木) 藤島敏男さんにお話をうかがいたく。

図書室利用について
本会の図書室は最近会員の皆様より利用される頻度も高くなつてきて喜ばしいことであるが、反面利用規定を守らない方々もあるので事務局として困ることもある。その原因が利用規定を会員がよく知らないこと、理由となつておぼろげです。掲載しましたからよく読んで下さい。以前に会報で

利用規定が掲載されたことがあります。読んでいないのか知らなかったという会員が多々ありますので、今度は知らなかったではすみません。この規定を守り会員のためのよりよい図書室になるように御協力下さい。なお特に注意点として左記のことに気をつけて下さい。

- 1、会員外の利用には必ず会員の紹介が必要で、その時は紹介状を持たせるか、会員が電話をルームにして下さい。
- 2、月曜日は図書室は休室日となっております。
- 3、図書室に入室して閲覧する時は閲覧ノートに会員番号、氏名、閲覧する図書の書名を記入すること。
- 4、複写は原則として行っておりませんが、どうしても複写したい場合は係員の許可が必要です。
- 5、貸出は会務の必要上以外は行いません。
- 6、図書室は談話室ではなく書物を読むところです。読書中の方に迷惑にならないように気をつけて下さい。(図書委員会)

『日本山岳会図書利用規定』(適用範囲)
一、本会の図書の利用はすべてこの規定の定めるところによる。
(利用の方法)
二、この規定による図書の利用の方法は室内閲覧、複写、及び貸出とする。
(閲覧のできる者)
三、図書を閲覧できるものは、原則として本会の会員に限る。ただし会員の紹介があり、図書委員の許可があれば会員以外でも閲覧することができ。
(閲覧時間)

- 四、図書の閲覧時間は休館日(日曜、祝祭日、ならびに年末年始ならびに月曜日を除く)の午後一時三十分より、午後八時までとする。
(弁償の責任)
五、閲覧または貸出中に図書を亡失または損傷したものは図書委員会が別に定める方法により弁償しなければならぬ。
(閲覧の手続き)
六、図書を閲覧するために図書室に入室する時は備付けの閲覧簿、または閲覧票に所定の事項を記入した上図書担当職員に許可を得なければならぬ。
(閲覧の方法)
七、本会の図書は図書案内の書架に保管する一般閲覧利用図書ならびに談話室内の書棚に保管する貴重書準貴重書の二種に分けて保管する。
1 一般図書の閲覧
一 一般図書を閲覧しようとするものは図書担当職員に許可を受けた後、自由に閲覧することができ。
2 貴重図書の閲覧
貴重図書を閲覧しようとするものは、カード、インデックスにて検索し所定の閲覧票に記入した上、図書担当職員に申し出るものとする。貴重図書の書棚の鍵の取扱いは図書委員及び図書担当職員以外の者は取扱うことができない。
(閲覧後の手続き)
八、閲覧終了後は貴重図書については図書担当職員に返納するものとし開架書架の一般図書については閲覧図書を所定の位置に返納した後図書担当職員に閲覧の終了を報告するものとする。
(複写の申込み)
九、複写を希望するものは図書委員または図書担当職員に申し込み許可を受けなければならない。
(複写の方法)
十、複写は原則として複写を希望するものがみずから写真撮影により図書室内で行わなければならない。別の方法により別の場所で行う場合は貸出の項の規定による。
(貸出)
十一、原則として図書の貸出しは行わない。ただし会務のために使用する場合で担当理事が必要と認められた場合には貸出期間中にも貸出図書の返納を求めることができる。
(規定の改廃)
十二、本規定の改廃は理事会においてこれを行なうものとする。
(付則)
本規定は昭和四十六年十二月十三日より施行する。以上

会務報告

- ルーム日誌(46年12月)
- 3日(金) 学生部委員会
 - 4日(土) 昭年四十六年度年次晩餐会
 - 5日(日) ヲヤサラン
 - 6日(月) 学生部委員会
 - 8日(水) 図書委員会
 - 10日(金) エヘレスト編集委員会
 - 11日(土) 青年懇談会発会式
 - 13日(月) 理事評議員会
 - 15日(水) 第二七九回小集会亡年会
 - 24日(金) 青年懇談会
 - 十二月来室者 二九〇名
 - 会員移動
 - 休会(46年12月)
 - 六七三二 佐藤之敏(海外在留)
 - 物故者
 - 七五一 佐藤隆太郎 昭和四六・一二・二四逝去

- 一三三五 村井栄一 昭和四六・二二 九逝去
- 二七 岡基徳之助 昭和四七・一 九逝去

会員名簿 1971 訂正

- 一九頁上九行と一〇行間に挿入 尾崎 忠次 四四五 五六・一〇 千四
- 二〇 静岡市安西三三六〇 (〇五 四二) 七一・一〇四四九
- 六〇頁上二行泰平寺直 道会員番号 五三九六
- 六一頁上二行高橋英彦 会員番号 五一九三
- 六九頁下九行六二〇八 氏名・東京学芸大学山岳会
- 七三頁上四行五七〇 電話 (〇三三) 三三二一七七六
- 七九頁上六行に挿入 日本歯科大学山岳部 四八六二 五九・四 千一〇二
- 千代田区富士見町一―一九一〇〇
- 一〇一頁上二行五五五〇 電話 (〇三三) 四六八一〇一四

一月理事評議員会

(17日午後6時本会ルーム)

- ▽出席者 成瀬、吉沢副会長、中屋山崎、藤井、宮下、中島、野上、熊谷村井、坂下各理事、村山、織内、小原金坂、折井、望月、中田、加藤各評議員、今井監事、山口委員
- ▽議事

・秩父宮学術賞の件 (村山・藤井)
 第八回秩父宮記念学術賞に日本山岳会エベレスト隊が内定した。三月上旬授賞式が銀行クラブで行なわれる。エベレストの学術調査が認められたものである。

なお授賞式当日本会ルームで祝賀をかね、エベレスト登頂記念メダル(松本徹章寄贈)の授与式をやりたい。

・上高地山岳研究所の件 (山崎)
 昨年十二月二十一日、三田会長、中屋常務理事が文部省体育局長と会い自転車振興会の交付金について協力を依頼してきた。文化庁へは長野県庁から書類がまわってきている段階であるが環境庁と自転車振興会との話し合いなどあるので、まだ許可についての見通しはたっていない。

・書評委員会の件 (織内)
 島田巽、近藤信行、山崎安治、伊倉剛三、中島寛、織内信彦の六人を委員に委嘱し、金報山、山岳への図書評を積極的に進めたい。この件了承。

・エベレスト報告書の件 (中島)
 一部を行動編、二部を学術編としてオフセット印刷、横組みで千五百部作っており、二月二十日ごろでき上る。五百部は関係各方面、会員で五千円以上寄付した方などへの寄贈とし、あとは一般に頒布したい。まだ頒布は決めている。

・現地支部長会議の件 (山崎)
 昭和四十七年度の現地小集会をかねた支部長は秋田支部が担当、鳥海山で行なう。時期は五月上旬と秋田支部から連絡がきているが、交通が混雑するので、五月上旬でなくずらしたらよいのではないかと。これは秋田支部と連絡をとる。詳細は山に発表する。

▽報告
 ・韓国合同高所医学ゼミナーの件 (大森)
 一月上旬ソウルで行なわれ、日本から中島、住吉、長尾、大森の四人が出席した。

日韓合同高所医学ゼミナー

本会と韓国山岳会合同の高所医学に関するゼミナーが去る一月三日に韓国ソウルのアカデミーハウスで開催された。

このゼミナーは、一昨年九月に韓国山岳会創立二十五周年記念祝典に参列した本会々員のうち、広谷光一郎、大森薫雄両名が当時エベレストから帰って間もない頃であったため、エベレストにおける種々の医学的データについて、専門家間で話題になったのがきっかけになり、その後昨年九月、李敏載韓国山岳会々長が東京を訪れ、大森薫雄、関口周也両名と再会の折、再び話題となり、開催が具体的に進められたものである。

李会長帰国後、十月に韓国山岳会から本会々長宛にゼミナー開催について提案があり、本会では、理事会の決定に基づいて医療委員会により、住吉仙也、中島道郎、長尾徳夫、大森薫雄各医療委員会メンバーの派遣を決定し、関口周也海外連絡委員が先方との連絡を担当、同行することになった。

一行は一月二日ソウル市到着、韓国山岳会により用意された会場、アカデミーハウスに入り、翌三日からのゼミナーに備えた。

韓国側からは、張在憲ソウル大医科大教授をはじめとする韓国医科大のそうとうたるメンバーと韓国山岳会の幹部多数の参加が予定されていたが新年早々ということであったためか、全員が参会することができなかったが、それでも、若い現役の人達も多数集り盛会であった。

ゼミナーは、韓国側、張博士、日本側、住吉の司会により進められ、李会長の挨拶、関口の本会からのメッセージ伝達のと、住吉の「高度順化について」大森の「高所における血液化学変化について」屋食をばさんで、中島の「高所における心肺機能について」長尾の「凍傷の予防と治療」と題する講演を行なった。各講演は四十分間で終りに質疑応答と意見交換が行なわれ、最後に、一般を対象として、住吉による「エベレスト登山」のスライド上映と高度順化に関する質疑応答があり、定刻を過ぎ、午後五時半、全プログラムを終了した。

各講演は、エベレスト遠征の際の医療データに基くもので、非常に興味あるものであったが、通訳等のももあって、若い人達には充分理解されなかったのではないかと反省している。これも、始めての試みであったため仕方ないことであるけれども、ゼミナーの開催そのものについては、大いに意義あるものであったと自負している。

また、韓国山岳会からは、最近ヨーロッパアルプスへ十名からなる訓練隊を派遣するなどして、ヒマラヤ遠征の準備を着々進めているときであり、高所医学、特に高度順化の問題については強い関心を示しているときでもあったこのゼミナーは当を得た企画であったわけである。

将来も、このような形や、いろいろの機会をとらえて、隣国の山仲間達と親しくお付き合いし、何らかのお役に立つことができれば、望外の幸せであり、また両国山岳会の友好関係を一層密接なものにすることができると信じてやまない。(大森・関口)

会員通信

山歩き五十年

百瀬 一茂

昨年は小生に取って最良の年であった

たと思う。というのは私には五人の子供があるが昨年三月末に嫁を取り一応親の役目ははたし、内孫も四月男の児が生れ安心しました。

また念願の孫をつれて登山ができたから楽しいだろうなあと常々思っていたが、八月白馬三山を一泊でやり楽しい愉快な山行ができましたし、山歩きも十余回できたということは大きな収穫でした。

今年は私が山歩きを始めてちょうど五十年ですが、その間一年も欠かさず連続五十年登れたということ、は、私の一つの誇りだと思います。戦争中と終戦直後ころは登山など口にも大きく出すことができず、こっそり暗いうちに家を出て夜中に帰宅し友人にも内緒にしていました。今日まで安全登山をモットーにし無事今日あるは一重に日本山岳会の諸先輩や、信濃支部の先輩や友人を始め山関係の方々の御指導や御協力の賜であったことを思い、深甚なる感謝の意を表したいと思ひます。

今年は私の所属している波田山岳会も創立二十周年にもなるので、何かよ記念山行をしたいと正月から張切り、去る一月六日鉢伏山(一九二八・五)へ登りましたが、今年は積雪が少なく三十センチ位でした。曇天で展望悪く下山したところ翌七日は早朝より快晴で再度登りましたと、南北中アルプスから富士山、八ヶ岳等三百六十度の展望をほいほいまして下山しました。今年の計画はたいてい予定しているのが八回位ですが、おそらく十回回れると思ひますが、無事楽しい山行ができるように、なおすべてのアルピニスト達の安全登山を祈念してペンを置きます。本御参集の諸兄へ直敷くお伝え下さい。なお六月三、四日のウエストン祭には多数お出掛け下さい。(47年新春)

落馬・天神便り

日高信六郎

拜啓 やつと帰って参りました。

出発前大変くわしい御教示をいただきましたのに、ルクラの部落を出るか出ないうちに「ラクバ・テンシン」に相成り、カトマンズのミッシェン病院に入院し醜態を演じ、JACCの面目をつぶした次第、恐れ入っております。

その上、ルンビニ関係の会議は印パ戦争勃発のため空路が乱れお流れとなり、帰りの見当つかず、その間ノンビリ日向ボッコをしたり人に会ったり、多少見物したり(コダリ路はバドガオンの先の峠まで)、ヤツと十五日印度度航空(唯一の運航線)をつかまえニュー・デリー、ボンベイと灯火管制下の二晩を過し、十七日に帰りました。

ヒマラヤには御縁が少なく、はじめボカラに三日ばかり居た時も曇って山が見えず、ルクラ行きは好天でしたが前記の始末、例の峠からはよく晴れて山々を眺

めた程度。ニュー・デリーへの空路は雲霧で一向見渡せずという次第でした。十一月末にパーティを開き百三十人ばかり来会者あり、美人記者のミス・ハリーがいて、ハント、ヒラリー夫妻が来ていること、例のハーモニカはシエルバ学校の賞品にあてられたことなどを聞きました。

また、テンジンがどこかのパーティと登山をしていたのに会ったという人の話を聞きました。

ヒラリー夫妻とはニュー・デリーまで同機でした。小生脚の具合わるいを見て大変親切に世話してくれました。ロバーツにはボカラ空港で立話し一刻。はじめてこの場所を横さんに会ったこと、エヴェレスト隊の植村、伊藤二隊員が大変よかったことなど話し、日本隊が沢山来過ぎて他国のそねみを集めかけていること、遭難過多も困ったもの、何とかならぬかというので、日本では政府も日山協もナカナカ制限することはむづかしい事情を説明したところ、それではネパール政府が毎年登山隊数をしぼって各国が各自自制して選抜するようにする外はあるまいと私見を洩らし、私にもその実現に協力するようすすめました。

(吉沢宛、12月23日付)

あとがき 明治34年発行「内外大家世界探検」という本に「比摩拉耶紀行」という一文が出ている。非常に珍しいので次号で紹介したい。(山崎)

昭和四十七年二月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三一二三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(233)七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著
〈A 5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著
〈B 6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行者
〈B 5判206頁〉定価2,800円

約40年のキャリアをもつ編集と内容。
赤いカバーでおなじみの……

山日記1972年版

日本山岳会編
〈A 6判368頁〉定価750円

山岳

日本山岳会編
〈A 5判〉

総索引	1,000円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編
〈A 5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星昌編
〈B 6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編
〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

日高山脈

北大山の会編
〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
〈A 変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編
〈A 12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋進編
〈A 5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

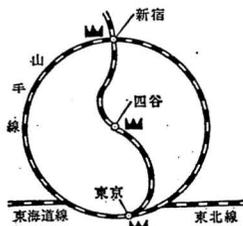
東京大学カラコルム遠征隊編
〈B 5変型判220頁〉定価3,000円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たら
山の店
- フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 65664
日本信販加盟店



山友社 **たかはし**

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



たろびンテイ
でん 281-8456
中央区八重洲4-11

香山荘

登山とスキー一具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区堂島橋上一丁目47 (364)0933(代)
福岡店・須崎町1-4 (28)3440